

平成 13 年度試験研究成果

区分	普及	題名	水稻オリジナル品種「いわてっこ」の栽培法
<p>(要約)</p> <p>良質米生産の目安とする期待生育量は、m^2あたり穂数 420 ~ 500 本、籾数 27 千 ~ 33 千粒、登熟歩合 80 % 以上、この時の玄米収量は 500 ~ 550kg / 10a である。施肥量はあきたこまち並とし、基肥窒素施用量は 6kg/10a 以下、幼形期追肥を基準とし 2kg/10a とする。刈り取り適期の目安は出穂後積算温度 950 ~ 1050 度である。</p>			
キ - ワ - ド	いわてっこ	良質米生産技術	県北農業研究所 やませ利用研究室 営農技術研究室 農 産 部 水田作研究室

1 背景とねらい

平成 13 年に県奨励品種に採用された水稻品種「いわてっこ」は、早生品種としては良食味でかつ耐冷性・耐病性に優れ、県央・県北地域で評価が高く、次年度には急激な作付け拡大がみこまれている。

このため、前年までの試験成績に加え、平成 13 年に実施した各種試験結果及び県内各地のモデル栽培圃等の調査結果をとりまとめ、今後の栽培指導の資とする。

2 技術の内容

1) 期待生育量

いわてっこの良質米安定生産にむけた期待生育量は次の範囲とする。(図 1 ~ 3)

収量水準 kg/10a (1.9 mm篩)	穂 数 本 / m^2	1 穂籾数 粒	籾 数 千粒 / m^2	玄米千粒重 g (1.9 mm篩)	登熟歩合 %	稈 長 cm
500 ~ 550	420 ~ 500	65	27 ~ 33	22.7	80 ~ 90	75 ~ 85

2) 施肥法

ア 施肥量は、あきたこまち並とし、基肥窒素施用量は 6kg/10a 以下、追肥は幼形期追肥を基準とし 2kg/10a とする。(図 4)

イ 多肥では倒伏しやすく、玄米品質・食味が低下をしやすいため、多肥栽培は行わない。

3) 刈り取り適期

出穂後成熟期までの積算温度はおおむね 950 ~ 1050 度とする。(図 5)

3 普及上の留意点

- 1) いもち病に対しては、たかねみのりより抵抗性が弱いので基本防除は厳守する。
- 2) 最高分けつ期の目標茎数は 550 ~ 650 本 / m^2 。
- 3) 幼形期追肥を基本とし、葉色が濃い場合は追肥を控える。
- 4) 幼形期における稲体窒素濃度は 2 % 前後、稲体窒素吸収量は 5 ~ 7 g / m^2 と推定された。葉色は「たかねみのり」より淡い傾向にある。
- 5) 品質・食味を低下させないため、肥培管理の徹底、適地作付けを厳守する。
- 6) 籾数が少ない場合、出穂後積算温度 900 度前後でも成熟期に達することがあるので、適期刈取りに努める。
- 7) 今後とも生育・栄養診断基準の検討を引き続き行う。

4 技術の適応地帯

県央・県北地域

5 当該事項に係わる試験研究課題

(36)奨励品種決定本調査

(47)栽培条件に対応した高品質・良食味生産技術の開発 (1110、1120)岩南16号の栽培特性

6 参考文献・資料

平成12年度試験研究成果 品種 早生水稲良質良食味と耐冷性を兼ね備えた「岩南16号」

7 試験成績の概要

(具体的なデータ)

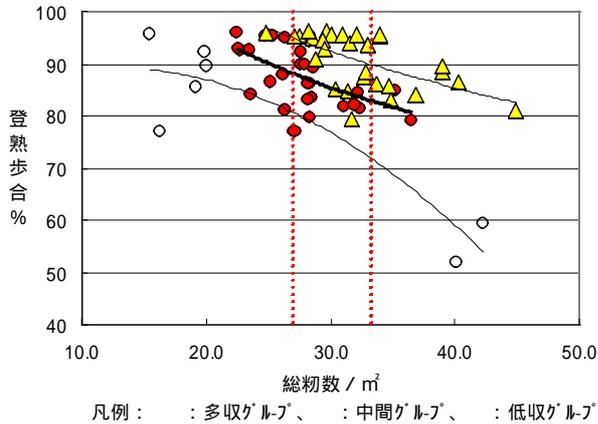


図1 m²籾数と登熟歩合(H11~13)

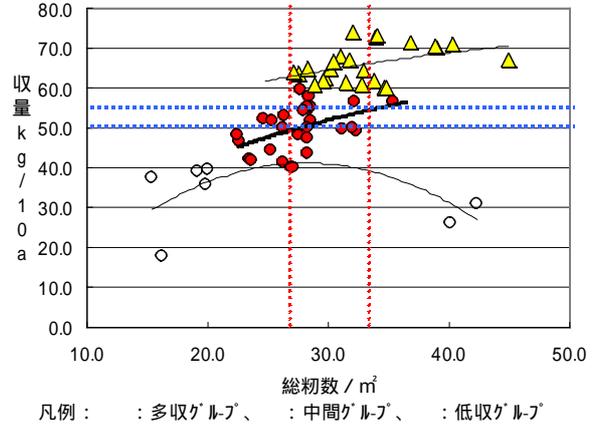


図2 m²籾数と玄米収量(H11~13)

・夏期高温年には収量 600kg/10a 以上、登熟歩合 90% 以上の多収事例も多いが、平成 13 年には登熟歩合 80 ~ 90 %、籾数 27 ~ 33 千粒、収量 500 ~ 550kg/10a である。

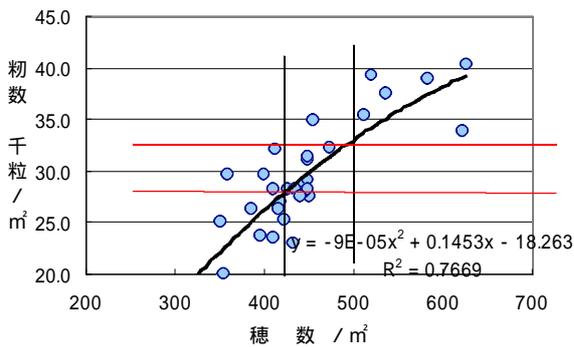
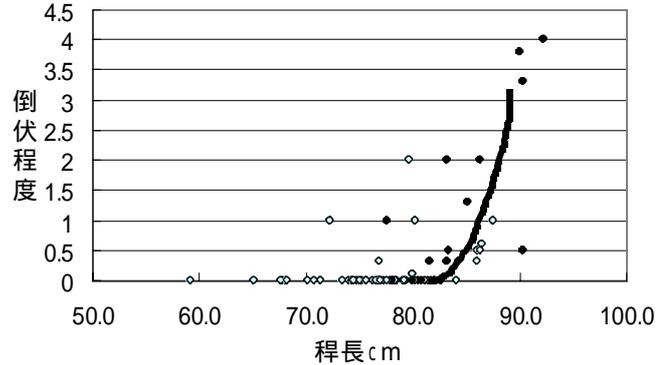


図3 穂数とm²籾数(H11~13)



凡例： 基肥 N8kg 以上 N8kg 未満

図4 稈長と倒伏(H11~13)

・稈長 85 cm 以上では倒伏程度 2 以上となることが多い。
・基肥 N が 8kg/10a 以上では稈長 85cm 以上になり倒伏しやすい。

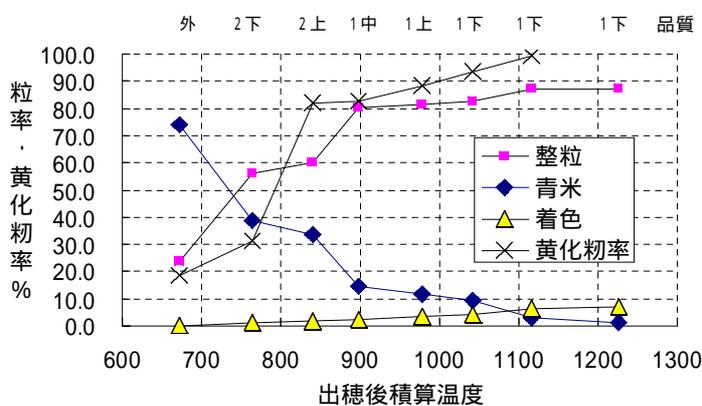


図5 出穂後積算温度と整粒歩合・黄化籾率の推移(H13)

・出穂後積算温度 950 ~ 1050 度で成熟期に達し、1100 度以上では着色米等が増加し、品質が低下する。